

New York: Norton, 1972.

——, *Werke* [MEW]. Berlin: Dietz, 1962.

Mehring, Franz. "Karl Marx and Metaphor," in *Karl Marx and Friedrich Engels*. New York: Monthly Review Press, 1973, 95-101 [trans. of "Karl Marx und das Gleichnis." *Neue Zeit* March 13, 1908].

Michel, Karl Markus, ed. *Politische Katechismen: Volney, Kleist, Hess*. Frankfurt: Insel, 1966.

Mierau, Fritz, ed. *Sprache und Stil Lenins*. München: Hanser, 1950 [trans. from LEF 1.5 (1924)].

Mitchell, Hannah. "Art and the French Revolution." *History Workshop* no. 5 (Spring 1978): 123-46.

Papaioannou, Kostas. *Marx et les marxistes*. Paris: Flammarion, 1972.

Plaks, Andrew H. *Archeotype and Allegory in the "Dream of the Red Chamber"*. Princeton: Princeton University Press, 1976.

Plischke, Hans. *Die Sage vom Wilden Heere im deutschen Volke*. Erlenburg: Offenhauer, 1914.

Pravet, S.S. *Karl Marx and World Literature*. Oxford: Oxford University Press, 1978.

Pugliatti, Paola Gulli. *I segni latenti*. Firenze: D'Anna, 1976.

Ramus, Pierre [pseud. of Rudolf Grossmann]. *Die Urheberschaft des Kommunistischen Manifests*. Berlin: Freier Arbeiter V., 1906.

Reeves, Nigel. "Atta Troll and His Executioners." *Euphorion* 73 (1979): 388-409.

——, "Heine and the Young Marx." *Oxford Germanic Studies* no. 7 (1973): 47-72.

Segre, Cesare. "Poetica," in *Enciclopedia Einaudi*. Torino: Einaudi, 1980, 10: 818-37.

Silva, Ludovico. *El Esilio literario de Marx*. Mexico: Siglo XXI, 1975.

Struik, Dirk J. *Birth of the Communist Manifesto*. New York: International Publ., 1971.

Suvín, Darko. "On Metaphoricity and Narrativity in Fiction." *SubStance* no. 48 (1986): 51-67.

——, "Transubstantiation of Production and Creation." *The Minnesota Review*, no. 18 (1982): 102-15.

Walton, Paul, and Stuart Hall, eds. *Situating Marx*. London: Human Context Books, 1972.

Wartburg, Walther von. *Französisches Etymologisches Wörterbuch*. Basel: Zbinden, 1969.

Zilberfarb, I [oganson] I. "Bankrotstvo epigonov fur' erizma," in *Iz istorii sotsial'no-politicheskikh idei* [Festschrift V.P. Volgin]. Moskva: Izd. Akademii Nauk SSSR, 1955, 548-69.

——, *Sotsial'naiia filosofia Sharlita Fur'e i ee mesto v sotsialisticheskoi mysli pervoi poloviny XIX veka*. Moskva: Nauka, 1964.

レトリックとリアリズム

方法の復権

西部忠

。方法論から諸方法へ

八〇年代後半から経済学方法論をめぐる欧米の論説において、二大潮流が現れてきている。レトリック (rhetoric) 論と超越論的リアリズム (transcendental realism) である。これらはいずれも実証主義的な科学概念——それを前者はモダニズム (modernism) と呼び、後者は経験論的リアリズム (empirical realism) と呼ぶ——の批判から出発するという点で共通しているものの、スペクトル上では両極端に位置している。

いうまでもなく、経済学とは科学なのかという問いそのものは決して目新しいものではない。今世紀の科学概念を席卷した実証主義や反証主義はこの問いに答えるために提出された。フリードマンの実証主義 (Friedman [1953]) およびポパーの反証主義 (Popper [1963]) がその典型である。フリードマンの実証主義とは、科学的

理論が「仮説・演繹」により構成されるモデルからなるものとし、ある理論の仮説が導く予測が経験的に検証されるか否かによって、つまりその予測の正しさによって、理論の妥当性を判断すべきであるという考え方である。また、ポパーの反証主義とは、一定の仮定群とそこから導出される言明の集合よりなる理論体系が経験科学であるための要件は、各言明が現実の観察データにより反証可能な形式で記述されているということであり、それらが反証されない限りは、その理論は科学的仮説として保持されうるとする考え方のことである。

これらは、科学／非科学の境界をさだめる要件やルールにより科学とはどうあるべきかを定義していると考ええることができるので、「定義的科学方法論」と呼ぶことができよう。こうした科学概念の底流に流れているのは、予測可能性や反証可能性といったなんらかの経験主義的な基準により科学と非科学の間に境界線を引き、そう

することで形而上学や思想などの疑似科学から経験科学を厳密に区分しようとする合理主義的態度と、前者の迷妄から後者を解放すべきであるという啓蒙主義的信念である。

クーンのパラダイムやラカトシュの科学的研究プログラムといった概念は、こうした実証主義的な科学方法論の限界を乗り越えようとする試みから生まれてきた。彼らは、現実の科学がこうした科学概念に基づいて発展してきたのではないことを明らかにし、その結果、境界設定基準により科学と非科学の区別を厳密に行うことは不可能であることを示したのである (Kuhn [1962], Lakatos [1972])。その後、ラカトシュの考えを経済学に導入して展開したコールドウェルは、ことに社会科学の分野では複数の理論が存在する可能性を原理的に承認することとなった (Caldwell [1982])。いわゆる「多元主義」(pluralism) の立場である。これらは、科学革命や科学的研究プログラムの進化論的發展過程をモデル化し、それをリアルに描写したという意味で、「記述的科学方法論」と呼んでもよいだろう (西部 [1996] 第7章)。

この多元主義の考え方を前提として、レトリック論と超越論的リアリズムは現れてきた。もちろんそれらは科学の要件をメタレベルで規定することを目的とする定義的科学方法論でも、科学の現実の発展や様態をメタレベルから説明することを目的とする記述的科学方法論でもない。レトリック論とは、経済学の言説やテキスト、説得と対話におけるレトリックを対象するテキスト論的なアプローチである。レトリックは個々の経済学者が固有の問題意識の領域で用いるさまざまな方法の総称にすぎないのであるから、むしろ、それは「反・方法論」としての方法にはかならない。これにたいし、他方の超越論的リアリズムは、特に社会科学の経験論的な基礎を認識論的・存在論的に批判する哲学を再構築しようとするものである。

1 経済学のレトリック

経済学はレトリックであるとの主張の急先鋒にたつのがドナルド・マクロスキー (Donald McCloskey) である。

経済学が予測することができるならば、次のようなアメリカ人的な質問に答えなければならない、いわく「もしあなたがそのように賢いなら、どうしてお金持ちではないんですか?」

(McCloskey [1985] p. 16, 邦訳一八頁) [以下漢数字は邦訳頁数を示す]

このようなレトリックにより、マクロスキーは、経済学は将来を予測する社会工学ではないこと、むしろそれが「社会的自己理解」に焦点を当てる特殊な歴史科学であることを説得しようと試みる。しかし、マクロスキーは、必ずしも経済学における数学的モデルの使用に異議を唱えているわけではない。むしろ、方法論的個人主義、論理的演繹的手法、モデル・ビルディング——ことに制約条件付き最大化ないし最小化の手法——にもとづく新古典派経済学 (広義の意味での) が今世紀において大きな成功を収めてきたこと、したがって経済学は実質的内容を持つという意味で科学であることを基本的に認めている。数学的モデルを認めるということが経済学の予測不可能性と必ずしも矛盾するものではないことは、たとえば、カオス理論のように決定論的なモデルが非決定論的で予測不可能な結果を生み出す場合を考えてみれば理解できるであらう。それは、基本的にモデルの性質に依存している。

マクロスキーが主として問題としているのは、現代の経済学が前提としている方法論的態度としての「モダニズム」である。モダニ

それは、経験論的リアリズムとは異なる存在論に基づき世界を説明するための代替的な方法であって、むしろ先に述べたどちらの方法論にもあたらない。レトリカルにいうなら、前者がテキストの平面を横断しようとする試みであるとすれば、後者はむしろリアリティにたいし垂直軸にそって交わろうと企てており、その方向性はいわば九〇度の角度で交わるようにみえる。だが、レトリック論と超越論的リアリズムは、互いに排除しあうというよりはむしろ相互補完的な、実証主義に対する反実証主義的な二本の軸——二つの方法——を指し示しているのである。

これにたいし、いわばこれらの中間に位置するような試みとして、すでにキーン (Quine) の全体主義やフラーセン (Frasssen) の建設的経験主義に基礎をおく「因果論的全体主義」(causal holism) が現れてきている。それは、レトリック論と超越論的リアリズムにたいする経験主義的方法論の再建を目的としており、経済学におけるモデルの役割——特にそれが現実の経済事象や観察可能な原因を経験主義的な意味で適切に記述することができる点——に注目している (Boylan & O'gorman [1995])。

先ほど述べたように、科学方法論の議論のなから定義的および記述的な科学方法論が現れ、結果的に多元主義的認識が引き出された。多元主義が規範的科学方法論を否定し、諸理論の競合を正常な事態とみなすことによつて、方法に関する議論を復活させる舞台を作り出したとみるべきだろうか。あるいは、諸方法の登場は、資本主義対社会主義という大きな物語の終焉後の現在における、諸価値の分立を反映しているのだろうか。メタ理論としての方法論から諸方法への回帰、すなわち「方法の復権」という結論へたどりつくために、われわれはレトリック論の入口へとまずは進むことにしよう。

ズム的方法論は、予測、制御、観察、実験、測定、法則による説明目的と手段の峻別、目的や価値の排除を基本的な特徴としており、それは主として一九世紀までの自然科学の方法論に合致する。

主流派経済学では、科学主義、実証主義、客観主義に依拠することのようなモダニズム的な経済学方法論が広く受容されているにもかかわらず、奇妙なことに実際の議論や対話において経済学者がそうした方法論を使っているわけではない。だが、それはなんら不思議なことではない。

マクロスキーは、経済学の実践において経済学者が実際に使っている道具箱としての方法を、モダニストや科学哲学者により作り出された厳密にルール拘束的な「大文字の方法論」(Methodology) から区別するために、「小文字mの方法」(method with a small m) とよぶ。それは、いわば進行しつつある開かれた会話ないし対話において必要とされる暗黙的なルールないしは道徳——たとえば、明快さ、正直、忍耐のような——を意味している。言説の良否は、特定の方法論を遵守するかどうかではなく、会話に熱心かつ知的に貢献しようとするかにより決まってくる。マクロスキーによれば、モダニズムの方法論を厳密に遵守することは実行不可能であるし、実際の経済学の歴史を眺めてみれば、方法論を遵守することから経済学が発展してきたのではないことは明らかである。むしろそれに固執すれば経済学は決して進歩しない。経済学者が「小文字mの方法」を使うのは、このことを経済学者自身が直観的に知っているからにはかならない。

地質学者が物語を用い、物理学者が隠喩を用いるように、経済学者も説得のための技法としてこのような文学的方法——レトリック——をいたるところで用いている。需要供給曲線による市場の提示、経済学におけるゲーム論の使用、弾力性の概念、均衡、集計的資本

人的資源、集計的生産関数——これらはすべて経済学における隠喩とみなすことができる。たとえば、経済学者が用いる数学的モデルは、そのフォーマットを知っている人間に対しては最も効率的かつ効果的な方法であるけれども、それも説得のための技法という意味では、ある種の文学的修辭であり「非装飾的な隠喩」である。理論とは、このような隠喩を用いて経済学者が作り出す物語を説得しようとする試みであり、一般均衡論のような最も形式化された理論においても隠喩は本質的な役割を果たしている。

してみると、科学としての経済学もレトリックとして読まれなければならないのではない。むしろ、ここであるレトリックとは、単なる表現上の文飾ではなく、会話あるいは対話における説得の技芸(art)のことである。レトリックの重要性を認識することは必ずしも合理性を放棄することではなく、そうすることをつうじて、かえってモダニスト的方法論におけるよりも、いっそう自由な形式において合理性を復権することができるはずである。

批判のための第一歩は、ある議論が一体何についての議論なのか、それについて我々はどうか考えるのかではなく、それはどのような種類の議論なのか、いいかえればどのような説得の技法を利用する議論なのかを問うことであると、マクロスキーはいう。モデルと呼ばれる隠喩に依存しているのか、そのスタイルにより権威を得ているのか、他の物語を抑圧し、大家風に語ることに歴史を形作っているのか。経済学を批判するということは、それを格付けたり、破壊したりすることではなく、端的にそれをレトリカルに読むことである。経済学をさまざまな異なった様式において読むことを学ぶことで、経済学者はその「科学」をうまく批判することができる。口語的表現であろうと数学的表現であろうと、だれもがレトリックを使っているのだから、問題は、表現のもつ効果に対し自覚的である

か、そうでないかということだけである。経済学者は、経済学がレトリックであることを自覚的に意識した方がより実り多い対話を期待することができるし、経済学をより上手に実践できるのである。マクロスキーは、詩、小説、対話、会話などの形式で実にさまざまな隠喩を用いながら、この経済学者に対する「レトリックのすずめ」をレトリカルに語る。

2 方法としてのレトリック

しかし、マクロスキーの議論をまたずとも、経済学の歴史を少し振り返ってみるなら、レトリックというものは現代にいたるまで多くの経済学者が意識し、利用してきた方法であることがわかる。

たとえば、ケインズが彼の『一般理論』において、自己の理論を聴取者——主として同僚の経済学者が想定されていたが——に対して明確に際だたせ、印象づけ、彼らを説得するために、自覚的にレトリカルな戦略を採用したことは、つとに指摘されている(特に最近では、Henderson [1995] Chap. 8)。ケインズは、『一般理論』の冒頭で次のようにいう。

私は本書を、一般という接頭語に力点を置いて、『雇用・利子および貨幣の一般理論』(The General Theory of Employment, Interest and Money)と名づけた。このような題名をつけた目的は、私の議論と結論の性質を、同じ問題に関する古典派理論(the classical theory)のそれと対比しようとするところにある。(Keynes [1936], p. 3, 三頁)

ここでケインズはいくつかのレトリカルな戦略を意識的に用いている。まず第一に、リカード、J・S・ミル、マーシャル、ビグー

にいたるイギリス経済学の伝統を「古典派理論」(the classical theory)と総括することが、マルクスが用いて以来の伝統的な名称である「古典派経済学者」(the classical economists)——複数形であることに注意せよ——の意味からして語法違反であるということを知りながら——そのことを「古典派」という語に付した注でわざわざ触れているのであるから——、ケインズがこの語法を採用したのは戦略的な意図があったからと考えるのは当然であろう。ここには、まず、スミスからリカードまでの労働価値説に基礎をおく経済学を「古典派経済学」とよんだマルクスの分類法を無効にしようという戦略がある。ミルやマーシャルやビグーまでも、「古典派」に含めることで、特にリカードからマーシャルへの連続性を示唆し、その間の労働価値説から効用価値説への転換を抹消しようとするレトリックである。次に、ここでケインズが「古典派理論」に定冠詞theをつけ、しかも単数形の「理論」(theory)を使っているのは、実際にはリカード、ミル、マーシャル、ビグーの違いは決して小さいものではなく、そのことをケインズも知っているにもかかわらず、自分の先行者たちの間の個々の相違を無視して「古典派」と括り、自己の立場に対抗する勢力の単一性と不可分性を強調すること、それと自己の関係や差異を明確にするために自覚的に工夫されたレトリカルな戦略である。さらに、「一般理論」(The General Theory)にtheをつけている——「A General Theory」とすれば「多くのうちのひとつ」という意味になってしまふ——のは、自らの立場の一般性と固有性を強化するためのレトリックである。これが、当時すでに有名になっていたアインシュタインの「一般相対性理論」(The General Theory of Relativity) (一九一五年)にたいする掛詞になっているように見えることも、これを補強する役割を果たしている。

『一般理論』に対する書評のなかで、ビグーが「ケインズはアインシュタインが物理学において実際に成し遂げたことを経済学においておこなったと信じている」が、実際には「月に矢を射る芸術家」であると辛辣に批評しているのは、『一般理論』の理論的内容そのものに対する批判からというより、おそらく、リカードと自分を十把一絡げに括るケインズの強引で不正なやり口に対する憤りやアインシュタインに比肩すると自負するケインズの高慢に対する反発が皮肉な言い回しにより表現されていると見るべきなのだ。ケインズ程の自意識の持ち主であれば、こうした戦略手法がマルクスの古典派経済学批判からの借用であり、模倣であること、そしてこの手法が「古典派」と分類した人々——ことにビグー——にたいしどのような効果をもたらすかについても、おそらく熟知していたであろう。そして、ケインズが先に述べた戦略を採用したのは、それが彼にとって結果的には有利に働くことと確信してのことであつたと考えてほぼ間違いない。

先ほどの『一般理論』冒頭でケインズの言葉から、『一般理論』の末尾に来る次の言葉に目を移してみるなら、ケインズがなぜそのように考えたのかを知ることができる。

経済学者や政治哲学者の思想は、それが正しい場合にも間違っている場合にも、一般に考えられているよりもはるかに強力である。事実、世界を支配するものはそれ以外にはないのである。どのような知的影響とも無縁であるとみずから信じている実権者たちも、過去のある経済学者の奴隷であるのが普通である。権力の座にあって天声を聞くと称する狂人たちも、数年前のある三文学者から彼らの気違いじみた考えを引き出しているのである。私は、既得権益の力は思想の漸次的な浸透に比べて

著しく誇張されていると思う。もちろん、思想の浸透はただちにではなく、ある時間をおいた後に行われるものである。なぜなら、経済哲学および政治哲学の分野では、二五歳ないし三〇歳以後になって新しい理論の影響を受ける人は多くはなく、したがって官僚や政治家やさらには煽動家でさえも、現在の事態に適用する思想はおそらく最新のものではないからである。しかし、遅かれ早かれ、良かれ悪しかれ危険なものは、既得権益ではなくて思想である。(ibid., p. 383-84, 三八六頁)

ケインズは、経済学における「思想」が「世界を支配するものはそれ以外にはない」というほど強力な、あるいは「危険な」影響力をもつこと、だが「思想の浸透はただちにではなく、ある時間をおいた後に行われる」ことを知っていた。そして、ケインズがいうように「経済哲学および政治哲学の分野では、二五歳ないし三〇歳以後になって新しい理論の影響を受ける人は多くな」ということが、明らかに正しいとすれば、彼自身の『一般理論』も若い人々によって受け入れられる以外にはないと考えていたことになる。おそらく、彼らが影響力を持つようになるまでには数十年の時間を必要とするだろう。さらに、自分の意識的な戦略により、伝統的な古典派のキャンプに在る人々の心証を害し、かれらと決裂することで、『短期的』に不利益を被ることになろうとも、むしろ相手を論争の場に誘いだし自他の差異と自己の優劣を明確に若い人々に示すほうが『長期的』には自分の思想の影響力をより強めることができる、ケインズは『確信』していたと考えてもよいのではないか。

われわれは、先の文章から、ケインズのこのような期待や確信とそれにもとづく戦略を読まざるをえない。「個々人の創意は、合理的な計算が血気によって補足される場合のみ、適切なものとなる

出している。レトリックそのものが目的となり、レトリックのためのレトリックになるとき、それは無味乾燥で空虚なものになるほかあるまい。定型化された方法論のための方法論、テクスト論のためのテクスト論がおよそダイナミズムを持ちえないのはこのためである。

ここで、マクロスキーのレトリック論が、なぜこれほどのインパクトをもちえたかについても考えてみる必要がある。実際、マクロスキーのレトリック論自身もある特定の時代背景と場所から生まれてきたことを看過すべきではない。一九六〇年代にアングロ・アメリカンの経済学を志した大学院生の多くは、社会科学の女王である経済学を最もスマートな学問としてあこがれ、その実証主義を信奉していたのである(ことに、フリードマンのいた当時のシカゴ大学においてそのことは顕著であった、とそこに学んだマクロスキー自身が語っている)(McCloskey [1994] chap. 1, 2)。このように、仮説・演繹法のようなものとも簡略化された実証主義は、現実についての知識や経験がなくとも、どのような特定の問題や状況に対しても、だれもが利用できる非常にエコノミカルなツールであり、アヴァンギャルドとしての若者が年長者と戦うことのできる唯一の武器でもあったからである。言い換えれば、モダニズムや実証主義はヨーロッパ的な伝統と序列を重んじる学問風土に反逆し、そこに風穴を開けるドリルの役割を果たしていたわけである。この意味で、モダニズムはその当時、啓蒙的な役割を果たしていたし、自らもそれを信じていたと、マクロスキーはいう。ところが、七〇年代から八〇年代にかけて事情は変わってきた。実証主義的な科学概念には何の疑問も抱かない研究者が合理的期待形成仮説にかならず論文を大量生産していた八〇年代には、モダニズムはすでに異臭を放つようになっていた。マクロスキーのレトリック論が生まれてきたのはモダニズムが

る」(ibid., p. 162, 一六〇頁)というのであれば、もちろんこの確信にはケインズのいう「血気」(animal spirit)が含まれている。そして、ケインズの場合、その血気は「不活動よりむしろ活動を欲する自生的衝動」(ibid., p. 161, 一五九頁)といった人間の本能的な素朴主義だけでなく、より本質的には、『一般理論』を支える思想をその源としているといってもよい。確かに、その後の歴史の展開はこのケインズの確信と読みがある程度までは正しかったことを実証した。若い世代の経済学者は古い思想からの脱却を必要とせず、最初からこの新しい思想を受容したので、『一般理論』は急速にその影響力を広め、少なくとも六〇年代末までは広範な支持をえることになった。このように、強力な思想がレトリックを必要とし、そしてレトリックの力に後押しされて思想が急速に広まったという事情は、おそらくマルクスについてもあてはまるであらう。

むしろ、ケインズにせよマルクスにせよ、揺るぎない基礎を持つように見える正統的な経済学——彼らがそれぞれ古典派と呼ぶところの——を批判し、その理論との差異を明らかにし、彼ら自身の見解に力を与え、それを強固なものにするためにレトリックを意識的かつ戦略的に駆使したのである。あるいは、こういうべきかもしれない。「意識的かつ戦略的」にレトリックを用いたというよりも、彼らの強力な思想がかれらにレトリカルに語ることをむしろ強いるのであって、事実を曖昧にしたり歪曲したり、単に文飾により人を驚かしたり喜ばせたりすることを目的としてレトリックを用いたのではない。彼らは、自己の思想を表現するためにレトリックを用いるはかなかつたのである。しかも、レトリックはあくまで批判、論争、説得のための方法ではあるものの、それが強烈な血気に突き動かされ、明確な目的意識に裏打ちされた方法であるからこそ、単になんらかの目的のための手段にとどまりえないような説得力を生み

あまりにも当然に通用していたこのような時代であり、だからこそ、経済学に必要なものは技術とは異なる技芸なのだということを説得しようとするもう一つのレトリック、すなわちモダニズムという方法論に対する反・方法論が有効に作動したのではなかったろうか。そして実際のところ、こうしたレトリックを最も必要としていたのは、真理を主張する「大文字の方法論」からの脱却を開始しようとして格闘していた当のマクロスキー自身ではなかったか。

マクロスキーの著作を通して読んでみればわかるように、彼がレトリックにおけるそうした緊張や躍動を失わないでいられるのは、モダニズムに対する批判の領域においてであり、また、彼に向けられた多くの批判に対して彼がレトリック論の立場を擁護しようとしている時である。これにたいして、たとえば、「経済学者はもつとレトリックを使うべきである」といった類の、レトリックを経済学にとって有用な方法として唱道しようとするマクロスキーの議論ないしレトリックはわれわれに退屈さと疑わしきを感じさせる。というのも、マクロスキーが、レトリックは経済学にとり有意義であるとしていくらの効用を説得しようとも、そもそもレトリカルに語ることで説得すべき何ものかを持たない経済学者にとって、レトリックとは必要のない装飾品にすぎないことになるうし、かりに彼らがレトリックを用いたとしても、おそらく陳腐でつまらないものになるにちがいないからである。

つまり、経済学のレトリックについて結論めいたことをいうなら、経済学者は現に様々なレトリックを使っているし、これからも使うであらうが、レトリックは、モダニズムのようにすべての経済学者が一般的な状況に適用可能な、その意味で万人向きで便利な「方法論」とみなしてはならないということである。レトリックは、批判、説得、論争といった、特定の状況における強力な問題意識の磁場に

おいてのみダイナミックに作動する諸方法であるから、レトリック論は特定の問題にたいしどのようなレトリックを用いるべきかを教えてはくれない。この意味で、それは決して方法論にはなりえないのである。

3 超越論的リアリズムの存在論と認識論

レトリック論は、経済学のモダニズム的方法論の客観主義、科学主義、実証主義を問題にしてはいたが、それらの認識論のないし存在論的な基礎にまで遡って批判していたわけではない。たとえば、マクロースキーは、数学的モデルが一般に前提としている演繹的手法を否定したわけではなく、それがレトリックであると指摘しただけである。超越論的リアリズムはもう一歩進んで、経験科学の方法論的前提である演繹主義 (deductivism) や、その認識論・存在論にあたる経験的リアリズム (empirical realism) そのものを批判の対象にする。以下では、バスカー (Basker) のリアリズム論に依拠しながら展開されているトニー・ローソン (Tony Lawson) の叙述にしたがい、超越論的リアリズムを説明してみよう (Lawson [1992] [1994a] [1994b] [1996])。

演繹主義における事象の説明とは、初期条件と境界条件、および「事象 χ があるときにはいつも事象 γ がしたがう」という形式をとる普遍法則により、事象を演繹し、記述することにはかならない。そして、科学とはこのような「事象の不変的結合関係」 (constant conjunction of events) を確立することである。この法則における事象の結合関係はきわめて一般的に——すなわち決定論的にも、確率論的にも——解釈可能であり、しかもこの法則の定式化はその定立と評価の基準や方法——帰納法、反証主義、検証主義などの——にはなんら依存しない。どのような説明や分析においても、何らか

に存在し、それを支配する、還元不可能な構造や因果的メカニズム、力や傾向により構成されている。たとえば、ここでいう力とは、ある事物がある仕方で作動したり、それがそれ自身であるような性質のことである。しかし、それはわれわれの経験には現前しないのであり、その力はある一定の傾向としてのみ認知される。

したがって、リアリティ (reality) には、経験、事象、それを支配する構造やメカニズムおののに対応する、(1)「経験的」 (empirical) ——経験と印象——、(2)「現実的」 (actual) ——事象と事態——、そして(3)「非現実的」 (non-actual) ——あるいは隠喩的には「深層的」 (deep) と呼ぶる——の三つの層があると考えられることになる。超越論的リアリズムの経験論的リアリズムとの違いは、リアリティにおけるこの「非現実的」な層が存在論的に想定するかどうかにあるといつてよい (図参照)。

しかしより重要な点は、存在論的に区別されたこれらの三つの諸層は、認識論的にいえばお互いに非同期的 (unsynchronized) であり、非同調的 (out of phase) であるということである。このことは、ある層の構成要素 (たとえば、なんらかの事象) を、その他の層の構成要素 (それを支配するあるメカニズム) に必ずしも一対一に対応させることができないと言ひ換えることができるだろう。たと

経験論的リアリズム	
層	対象
現実的	事象 事態
経験的	経験 印象 知覚
異なる層は「融合」している 1対1対応	
超越論的リアリズム	
層	対象
非現実的	構造 メカニズム
現実的	向象 事象 事態
経験的	経験 印象 知覚
異なる層は「非同期的」 1対1対応しない	

図

の事象の不変的結合関係を同定し、確立することが要求されている。そして、現代の経済学はこのような演繹主義により特徴づけられる。かりに「事象 χ があるときにはいつも事象 γ がしたがう」という事象の不変的結合関係が生じるような体系をここで「閉鎖的」と呼ぶならば (その理由は後述する)、演繹主義における科学のイメージは、このような閉鎖系における規則性の同定にあることになるであろうし、演繹主義が一般に妥当するためには、現実にもそのような自発的閉鎖性が遍在していなければならない。

歴史的には、このような説明や科学の概念は、ヒュームの因果律分析にもとづくある種の「実証主義」 (positivism) から生じている。実証主義は、人間の知識は感覚的経験ないし印象の形式をとると主張する認識論と、現実には経験ないし印象の対象である原子的事象により構成されていると主張する存在論をあわせもつ。この見方によれば、現実とは経験に与えられるものであることになるので、それを「経験的リアリズム」とよぶことができるだろう。経験的リアリズムからみれば、もし科学が存在するならば、「事象 χ があるときにはいつも事象 γ がしたがう」というタイプの規則性の形式をとらざるをえない。なぜなら、特定の知識は経験に与えられる原子的事象に限定されているので、一般的知識ないし科学的知識は先に述べた事象の規則性の定立以外にはありえないからである。これが因果律にたいするヒュームのないし実証主義的な説明である。

ローソンによれば、これにたいして、超越論的リアリズム (transcendental realism) とは、つぎのような認識論的・存在論的な区分を立てることにより、現実を理解しようとする哲学的立場をさしている。

世界は、事象やそれにたいする経験や印象だけではなく、直接的には認知できないかもしれないが、われわれが経験する事象の背後には、非現実的な層にある構造と現実的な層にある事象の非対応性の例を挙げてみよう。秋の落葉という事象は、かならずしも経験的規則性をともなわないから、そこから、この事象の背後にある重力というメカニズムを抽象することはできない (ニュートンのリンゴの逸話も疑わしいが、少なくともリンゴの葉では逸話にもなるまい)。それはまた空気抵抗、気流、情性その他の諸力やメカニズムにも支配されているからである。換言すれば、事象はさまざまな相殺しあう諸要因により多元的に決定されているので、それを支配する諸原因はかならず事象を通して現れなければならないといえ、直接的に把握されないものである。

こうした超越論的リアリズムの観点からすると、経験論的リアリズムは、二つの誤謬を犯していることになる。まず第一に、世界を存在論的に定義するのに認識論上のカテゴリーである経験を使用するという、存在論と認識論の混同がある。そして第二に、存在に関する言明は知識に関する言明に還元でき、それによってのみ分析できる、すなわち、存在論の問題は認識論用語につねに翻訳可能であるという「認識上の誤謬」がある。この後者の誤りのために、経験論的リアリズムは経験されること、経験可能であることこそリアリティの重要な特徴であると考え、何かがリアルであることを説明すべき因果律を無視してしまう。

非現実的な深層構造はかならずしも現実的な事象の層に現れてこないという、超越論的リアリズムのリアリティに関するこのような考え方が、経験論的リアリズムとはまったく異なる科学観を生み出すのは当然であろう。超越論的リアリズムの立場における科学は、事象の不変的結合関係の発見に限定されたり、それに依存するといふわけではない。むしろ、われわれが関心を持つ諸現象を生み出し、それを支配する構造やメカニズムの存在を確認し、それらを解明す

ること——それらが当の諸現象を「説明する」ことである——が科学の目的となるのである。

そして、こうした代替的な科学と説明に関する概念は、それに固有な推論様式を必要とすることになる。経験論的リアリズムは、帰納法と演繹法の相対的有利性と限界、反証主義の正しい応用や解釈に関する議論に終始してきたが、超越論的リアリズムにおいて前提とされる推論様式で本質的な意味を持つものは、帰納法や演繹法ではなく、リトロダクション (retroduction) ないしアブダクション (abduction) あるいは比喩的推論 ("as if" reasoning) と呼びうるものである。それは、とりわけ類推 (analogy) や隠喩 (metaphor) にもとづいて、興味ある何らかの現象の概念から、その現象の主要な原因となる、全く異なる種類の物事、メカニズム、構造、ないし条件の概念へと移動することである。演繹法が「すべての鳥は黒い」という一般的な主張から「次に見る鳥も黒いだろう」という特殊な推論への動きであるとすれば、帰納法は「今までに多くの黒い鳥を見た」という特殊な観察から「すべての鳥は黒い」という一般的な主張への動きに他ならない。これは一般から特殊へ、特殊から一般へと向かう水平的な移動であるといってもよい。これに対して、リトロダクションないしアブダクションは、多くの黒い鳥を見たという特殊な観察から鳥を黒くする内在的なメカニズムの理論へと動くことであり、いわば、「表面の現象」から「より深層」の原因へと垂直的に遡行することである。

すでに述べたように表面にある現象を支配する構造を説明することとが、超越論的リアリズムの観点からする科学の目的であるとするなら、法則ないし法則的言明は事象の規則性ではなく、そうした構造やその作動様式を表現しなければならないことになる。しかも、この構造の作動を「傾向」として叙述しなければならないとすると、

することを理解するためには、知識の対象にも、構造やメカニズムにおけるインテンジティヴな次元と、観察、理論、仮説、推論、直感、直観、推測、変則事例における「トランジティヴ」(transitive)——可変的で他動的な——な次元が存在することを認識する必要がある。後者は、科学という社会的実践を可能にすると同時に、それを通じて頻繁に変形されている。したがって、知識は経験という確実な基礎ないし事実の上に構築されるものとははや考えられない。むしろ知識とは、さらなる知識を生産するための生産手段であり、他方で科学とは、継続的に変形される社会的活動として認識されなければならない。

こうして知識とは、知識の対象との継続的な相互作用を基礎にして、先行する社会的生産物である知識により生産され(再生産され)、また変形される社会的生産物であると理解されることになる。もしこれが知識とその生産様式の「性質」であるならば、知識過程 (knowledge process) すなわち科学の目的は、われわれの(少なくとも個人的な)知識から大部分において独立に存在し作用するインテンジティヴな対象——より特定化すれば、現象を生み出しているメカニズム——に関する知識の生産にあることになる。つまり、超越論的リアリズムによれば、知識の対象の方は、それに関するわれわれの知識から「かなりの程度」独立に存在し作用しているが、われわれが有する知識の方はつねに歴史的に特有な社会形式のなかにあり、絶えずその中の諸項目は科学という社会的労働過程において変換されているのである。科学が意味を持つのは、その研究対象のインテンジティヴな領域に注目することによってであるが、それと同時に、人間の科学的活動・能力のみならず認識の対象や材料がトランジティヴな性格をもつことも知らなければならないのである。

傾向に関する言明は「反事実的な」(counterfactual)言明でも、長期的な平均に関する言明でも、むしろ事象に関する言明でもないことになる。むしろそれは構造やその作動に関する「超事実的な」(transfactual)言明である。また、それは事象や経験に関する条件付き言明ではなく、非事象的ないし非経験的な事柄に関する無条件の言明である。さらに、それは「他の条件が等しければ」という制約のもとでの論理的必然性に関する言明ではなく、何の要件も付されない自然的必然性に関する言明になる。つまり、それは事象、経験、論理、条件にかんする言明ではなく、事象がどのようなようとも働いている「力」に関する言明であるといってもよい。このような見解が「超越論的」という形容詞をとるのはこのためであるといえよう。

こうして、超越論的リアリズムは、リアリティが、経験できる諸事象に還元不可能であるという意味で「構造化」された、あるいはまた、われわれがその存在を同定しないに関わりなく、独立に存在し作用するという意味で「インテンジティヴ」(intensive)な——不変的かつ自動的——対象により、部分的にせよ、構成されていることを主張することになる。

しかし、世界の対象が感覚的経験にたいして単に与えられていないだけでなく、構造やメカニズムが、それについてのわれわれの認識や知識から独立に作用するとする超越論的リアリズムにたつならば、知識はいわば無から生じることになるのだろうか。一体われわれはいかにして知識を獲得するのだろうか。

4 知識とは社会的生産物である

知識は無から生み出されるのではない。知識は事前に存在している「知識のような物質」の変形を通じて生み出される。これが意味

ローソンは明記していないが、こうした知識論がマルクスの労働過程と再生産の概念にまさに対応するものになっていることは容易に見て取ることができる。もちろん、この類似性に何の理由もないわけではない。マルクスの場合は、ここにおける知識と同じ役割を労働が果たしている。鍵となるのは、われわれの知識が経験される事象の規則性ではなく、超越論的でインテンジティヴな構造を対象とするものであると考えるならば、知識が社会的に絶えず変形され生産される社会的生産物であり、科学の営みが知識と知識のトランジティヴな対象により継続的に知識を生み出すような再生産過程であると考えざるをえないという点である。言い換えれば、知識は、知識が知識を手段として知識という対象を生み出す自律的運動過程の中にあるということが明らかにされるのである。実際、超越論的リアリズムの見地からすれば、知識過程は労働過程と読み変えてもよい。なぜなら、科学とは、将来の人々にたいして「知識のような物質」、すなわちトランジティヴな知識の対象を手間暇かけて生み出す労働という行為に他ならず、それは一般生産物ないし商品を生産する活動とそれ自身としては異なるところがないからである。それと同時に、「知識」や「科学」は達成ないし獲得された結果をさすものというよりも、過程的にのみ存在するものでもあるからである。

しかし、それにしてもなぜインテンジティヴな次元が存在すると存在論的に想定しなければならないのか。それこそまさに形而上学であり、ドグマではないのか。

このようなありうべき反問に答えるためには、むしろ経験論的リアリズムの科学概念にいかなる限界があるのかをもうすこし具体的にみてみる必要がある。超越論的リアリズムの存在論にもとづく知識の理論は、自然科学にも社会科学にも妥当する一般的なものである。

るが、特に重要なことは、超越論的リアリズムが社会の領域に適用されるときには、現実には観察や経験が可能でないようなルールや関係を含む社会的構造の概念が可能になるということである。この超越論的リアリズムの社会科学に対するインプリケーションは、あとで見ることにしよう。

5 閉鎖系と開放系

パスカーによれば、経験的リアリズムにもとづく伝統的な科学の概念は、事象の不変的結合関係を発見することではない。そして、科学的知見としていままでに確立されてきた事象の不変的結合関係のほとんどは実験的狀況においてのみ確立されていることに注意する必要がある。このことは、科学的結果が、「事象 x があるときにはいつも事象 y がしたがう」ではなくて、実際には「条件 E が満たされる場合のみ、事象 x があるときにはいつも事象 y がしたがう」(ここで、 E は実験状況を特定化する条件に相当する)という形式をとっていることを意味している。自然科学では、天文学を別にすれば、なんらかの自然法則が示すとされる事象の不変的結合関係は人的介入なしには発生しない。まして、社会科学においては、あるいは経済学においては、今までこのような事象の不変的結合関係は観察されていない。にもかかわらず、経験論的リアリズムは、実験的狀況の外部で事象を支配するものはないかについて応えてもいなければ、言及してもいない。

実験により支持された法則はしばしば実験的狀況の外部においてもうまく応用される。これは、自然の法則が意味するとされる、何らかの事象の規則性は、人間の介入から独立には一般には生じ得ないことを逆に意味している。実験とは、注目している特定のメカニズムの作動と実際に生じる事象との間に一対一の対応関係が得られ

るよう、それを妨害する可能性のある他のメカニズムを排除し、注目している特定のメカニズムを分離するよう人的に介入することである。実験的活動とは、法則が「実際に作動するような」希な状況(条件 E が満たされるような状況)を作り出すことではなく、非経験的な法則が経験的に「同定されるような」特殊な状況——すなわち「閉鎖系」——を工学的に作り出すことである。結局、実験とは人的介入により事象の規則性が観察可能な状況を作り出すことにほかならない。実際、何らかのメカニズムが作用しているかどうかは法則の特定化とは無関係であり、メカニズムは経験的なパターンがどのように生じるかに関わりなく作動している(条件 E が満たされようが満たされまいがメカニズムは作動している)。先程の例でいうならば秋の落葉はそこに事象の規則性が観察されようといえまいと、重力の作用を受けている。逆に言えば、通常こうした「閉鎖系」は自発的には生じていないのである。たとえば、計量経済学において想定される経験的規則性あるいは「推計関係」は、新たな観察が利用可能になると多くの場合成り立たなくなってしまう。このことは、現実の世界は一般的に閉鎖系ではなく複雑に構造化し、分化した開放系であり、そこにはせいぜい局所的な閉鎖系しか作り出せないということを物語っているのである。

このような法則概念を持っていたと考えられる経済学者として、ケインズ、マージナル、マルクス、J・S・ミルなどを挙げることができであろう。しかしここでは、経済学者が経済という世界をいかに誤って閉鎖系と捉えてしまうかの例として、フリードマンとルーカスを取り上げることにする。彼らに見られるのは、ある点まで、そしてある程度までは超越論的見地に立ちながら、その後経験論的誤謬に陥るという共通の構造である。

フリードマンの実証主義では、経済理論や仮説はその予測が正し

いならば、それらは「あたかもそうであるかのように」(as if)現実を説明しているといえるのであり、経済理論や仮説そのものが説明力や現実の妥当性をまったく持つ必要はないと考えられている。この点では超越論的リアリズムに近い。ところが、フリードマンが、仮説の説明力というものをすべて正しい予測可能性に還元し、予測可能性により理論を検証できると考えるとき、事象の不変的結合関係の同定を可能にする閉鎖系が現実の経済の世界に遍在するという経験主義的な仮定を暗黙の内に導入していることになる。この点で、経験論的リアリズムと同じ誤りを犯しているわけである。

次に、ルーカスの計量経済モデルに対する批判について簡単に検討してみよう(Lucas [1976])。

ルーカスはまず規則性決定論(確率論的ケースでは規則性確率論)と呼ぶべき形而上学的命題——すべての経済状況 y にたいし事象の集合 $\omega_1, \omega_2, \dots, \omega_n$ が存在し、 y と $\omega_1, \omega_2, \dots, \omega_n$ が何らかの(確率論的)定式化のもとで規則的に結合されている——を仮定する。これにより、暗黙的に、すべての同じ原因(の集合)は同じ結果をもたらし(自然の斉一性の仮定)、同じ結果は同じ原因(の集合)によるということが仮定されている。定式化すれば、時間 t における経済の状態は次の差分方程式で表される。

$$y_{t+1} = F(y_t, x_t, \theta, e_t)$$

ここで、 y_t は状態変数ベクトル、 x_t は外生変数ベクトル、 θ は固定パラメータ・ベクトル、 e_t は時間を通して系列無相関な攪乱項ベクトルである。 e_t の分布、 x_t の時系列、 F は与えられていると仮定されており、 θ を推計することがこのモデルの目的である。

この体系を閉じるためには、二つの条件が満足されなければなら

ない。まず、第一に、体系が完全に記述されるための、あるいは体系が効果的に孤立化されるための「外在的条件」がある。すなわち y にたいするすべての重要な影響は完全に内生化されるか、もし外生的影響があるとすれば、体系はそれから完全に分離されなければならない、という条件である。計量モデルの推計がうまく行かない場合、その結果を合理化するためにしばしばなされる議論は、何らかの重要な要因がモデルから除外されていたというものである。これは、この条件が満足されない状況について述べたものであるといつてよい。第二に、各経済主体の内的構造が推計期間を通じて不変であるという「内在的条件」がある。これは経済主体が内的構造を持たない原子であり、外的ショックに対して受動的にのみ反応すると仮定するかがり、自動的に満たされるであろう。しかし、一般には、外的事象は同じでも、内的状態が異なることにより経済主体の反応は異なることもありうる(たとえば、象を針でつついた場合、寝ているときと起きているときでは、その反応は全く違うであろう。あるいは、健康、気分、覚醒といった内的状態の違いにより、同じ外的刺激に対する人間の外部への反応がいかに違うかは常識であろう)。このような時、この条件は満たされないことになる。計量モデルの推計がうまく行かないときにはしばしば聞かれる第二の議論は、体系が十分にアトム的に、あるいはミクロ的に記述されていないというものであり、これはこの条件が満足されていないことを指しているといえよう。

超越論的リアリズムの立場からすれば、すでに見たように、体系を閉じるための外在的条件は一般には常に満足されないといえる。ところでルーカスの計量経済モデル批判は、実際にはこの外在的条件が成立しない特殊な場合を問題にしているのである。計量経済モデルにおける関数 F とパラメータ θ は、経済主体の最適意思決定ルールにより決定されており、もしこのルールが変わるなら、この

森の旅

山里の釣りからIII

内山節 新しい価値基準を模索する時代にあって、人々の山里をみる眼も変わってきている。山里を通じて近代社会・文明を本源的に問い続けてきた著者の思索の旅。 定価1854円

田口卯吉と経済学協会

松野尾裕 田口が主宰した経済学協会の活動の実態を発掘し、そこに展開された経済学の普及と政策形成との関わり、経済専門職能集団の形成などについて考察する。 定価6180円

分権時代の経済と福祉

鹿児島経済大学地域総合研究所編 不況のしわ寄せを受けつつ、多くの離島を抱えながらも地域の自立と分権をめざす鹿児島。21世紀に向けての活動実績と理論を追求。 定価2987円

家族経営の法人化を考える

実践事例と法人化への手引
宇佐美繁・亀和田秀雄編 意欲ある農業者が法人化を考え始めた。だがその具体像となるとなかなか見えてこない。事例をふまえ具体像と実務を解説し現場の要請に応える。 定価2472円

不良資産大国の崩壊と再生

大地からの日本再建プロジェクト
山本孝則 バブルの崩壊、住専問題、金融システムの不安定性など大きく揺れる日本社会。不良債権危機と住宅・都市問題の同時解決を提言する。 定価2884円

欧州の金融統合

EECから域内市場完成まで
岩田健治 いま欧州の資本市場はどうなっているか。80年代以降の金融統合を単なる「統合論」ではなく、EU国民経済形成の一環として過去にさかのぼって把握する。 定価3914円

総合研究開発機構(NIRA)
戦後経済政策資料研究会
経済安定本部戦後経済政策資料
内外調査資料

浅井良夫=編集・解題
全15冊/予約受付中
5月より隔月配本。'97年1月完結予定。
全冊揃定価324,450円(分売不可)
呈パンフレット

日本経済評論社

東京都千代田区神田神保町3-2 ☎2330-1661

に——人々の頭の中か、法文書の中か、コンピュータの中か——存

とである。市場を定義する一般的なルールは、最適化行動のような何らかの特定の行為や意思決定を指示するものではなく、人がどのように行動するかに関する枠組みを与え一定の禁止ないし制限を加えるだけである。したがって、超越論的リアリズムのチームでいうならば、構造としてのルールと事象としての人々の行為は非同期化していて、なんら一対一の対応関係を生成しないのである。ここから、どの経済主体もいつも別様に行動することができるといふ人間行動の自由度を所与とすれば、社会的構造は開放系としてのみ存在しようということが導かれる。その結果、経済的法則はどれも一般にせいぜい「傾向」としてのみ作用し、きわめてまれにのみ——たいてい意識的に作り出される場合にのみ——経験的規則性として現れるのである。こうして、社会的構造が開放系であることを認めるならば、経済的領域においてなんらかの経験的規則性を同定しようとするアプローチは原理的に成立しえないという結論に到達せざるをえないのである。

しかし、ルールやそれにより定義される市場が、どこにどのような——人々の頭の中か、法文書の中か、コンピュータの中か——存

7 方法の復権

超越論的リアリズムの知識論と社会科学論の展開は、経済学が説得の技法としての体系的修辭にはかならないというレトリック論の在するかを特定することはできないにせよ、イントランジティヴな次元にリアルに存在していることは疑いない。でなければ、われわれの経済生活は一日として成り立たないであろう。もちろんそれはわれわれの日常的行為の土台である同時に、われわれの日常的な経済的・社会的活動により意図されずに作り出され、再生産され、変形される条件である。それはまた、実証的あるいは経験的な方法ではなく、超越論的にしか存在していると言えないような存在なのである。

こうして、われわれは、超越論的リアリズムの抽象的な議論を迎って来るうちに最も馴染み深く、また経済学が当の対象とすべきルールと市場の世界にようやくたどりついたことに気付くのである。そして、不思議なことには、この出口はまた最初の入り口であったレトリックと隠喩の世界のすぐそばでもあるのだ。

人間主体と社会的構造は互いに他を前提としあうのだから、どち

6 超越論的リアリズムとハイエク

たとえ自然領域と社会領域がともに経験的事象を支配するメカニズムや構造により特徴づけられるという点で類似しているにせよ、社会的構造は、自然的構造と違ってその存在が人間主体に依存しているという点で大きく異なっている。

このように、ルーカスのケースでは、体系を閉じる条件がある特殊なケースにせよ問題にしたという点では超越論的リアリズムに接近しているのだが、結果的には体系を閉じる条件を与えることができるという結論に帰着する点で経験論的リアリズムに後退するのである。

それから一方を他方に還元することはできないし、また、どちらか一方を他方により同定することも、完全に記述することもできない。強調すべき点は、社会的構造は人間主体依存的であるので、それは人間活動においてのみ現れると同時に、何らかの社会的構造を前提にしなければ、経済主体の意識的行為は不可能になるということである。

たとえば、一九四二—四四年に発表された「科学主義と科学の研究」(Hayek [1965])の中で、ハイエクは社会科学のデータの主観的性格を強調して、自然科学の方法を無批判的に社会科学に移入しようとする科学主義を批判する。ハイエクは「社会科学にとっての事実」は、物理的用語で記述できるような「客観的事実」ではなく、むしろ経済主体の「意見」こそが事実であることを強調する。「人間の行為にかかわる限り、行為する人間がそう考えるものが事物なのである」(ibid. p. 27, 二四頁)と述べる時、ハイエクは基本的な方法論的個人主義の立場から経済主体の意見や態度を重視し、社会の全体的概念は個人から構成可能だと考える方向へ傾いている。

しかし、ハイエクもその後、方法論的個人主義からの転換を遂げる。哲学的観点からいえば、ハイエクは一九六〇年頃を境にして主観的観念論を脱し、疑似・超越論的リアリズムへと転換し、経験的事象を生み出す社会構造の概念を行為の社会的ルールという形式で発展させた(Fleetwood [1965])。また、経済理論の側面からみても、ハイエクは社会主義計算論争と一般均衡論批判を経由しながら独自の知識論と競争論を進展させ、社会的制度としての市場(自生的秩序論)といった認識に達し、最終的にはルールと秩序の問題に到達しているといつてよい(西部[1996]第4・7章)。ここで重要な点は、ハイエクがルールや市場を個人の行為や意思決定に還元できない構造や制度として認識するようになっていったというこ

アブリオリな主張をいわば立証することになっている（もちろん論理的な証明というよりも、存在論的な証明とでもいうべきであろう）。

これが、レトリックとリアリズムが相互補完的であると最初に述べたことの理由である。レトリックと隠喩は、超越論的リアリズムがリアリティを求めて進んでいかなければならない道であり、半ば強いられた方法なのである。

ところで、経済学もある種の知識である以上、社会的生産物であることは明らかであり、その知識過程は研究の手間暇を必要とする。しかし、それはまた、市場や経済と同様開放系であるから、一定のルールの存在を前提として、個々の研究者が自由に営む技能的な行為の集合であり、また個人的知識の生成とその交通によってのみ成立している。これがおそらく経済学の本質であって、このことを認めても経済学が一举に非理性的で非合理的なものになると恐怖を抱く必要もない。なにしろ、われわれの目の前には少なくとも二〇〇〇以上の伝統をもつトランジティヴな知識の対象としての経済学と、イントランジティヴな知識の対象である資本主義経済がそびえているわけであるし、もとよりそれ以外からは常に出発しようがないからだ。

マイケル・ポランニーは「知る」ということについてメタフォリカルに語っている。

私は、〈知る〉と (knowing) とは、知られる事物の能動的な把握 (comprehension) のことだとみなしているが、これは技能を要する活動である。技能をもつて〈知ること〉と〈すること (doing) 〉は、一組の個別的要因を手掛かりないし道具として、技能的な達成——それは実際のものでも理論的なものでもよい——の形成に従属させることなのである。そのときわれ

われは、これらの個別的要因を、こうして達成される内的に調和した実在物についての「焦点的意識」の内部で、「従属的に意識する」といってよいのだ。手掛かりや道具は、そうしたもののとして用いられる事物であり、それ自体が観察されることはない。それらはわれわれの身体の装備の延長物として用いられるのであるが、これによってわれわれ自身が〈在ること (being) 〉の様相がある程度変化することになる。把握の行為は、この限りでは不可逆的であり、また非批判的である。われわれは、これまで固定されてきた枠組の再形成をその中で批判的に検証できるようないかなる固定的枠組ももつことはできないのだ。

(Polanyi [1958] : iii頁)

この文章の「一組の個別的要因」のかわりに、「レトリック」と「リアリズム」を入れてもう一度読んでみていただきたい。「レトリック」や「リアリズム」は決して目的でも達成でもない。さまざまな経済学の概念や思考方法と同様、われわれは、「焦点的意識」である経済学のための「手がかかり」や「道具」として「従属的に意識」し、「用い」るべき方法である。しかも、それらは多くの優れた経済学者が過去において「身体の装備の延長物」として使ってきた方法である（確かに現在ではマイナーな方法ではあるが）。また、もちろんそれらは唯一の方法というような「固定的枠組」ではないし、少なくとも他の方法を非科学的であるとして排除するものではないであろう。

ポランニーは先の引用に続けて、〈知ること〉は「普遍的な有効性を主張する責任ある行為」であり、また「隠された実在との接触を確立する」客観的な行為でもあると述べている。レトリックと超越論的リアリズムはそのための方法でなければなら

ふたつ。

【参考文献】

- Boyian, T. A. & O'Gorman, P. F. [1995], *Beyond Rhetoric and Realism in Economics*, Routledge.
- Caldwell, B. J. [1982], *Beyond Positivism*, George Allen & Unwin. (原田・敏彦訳『経済主義を疑ふ』、中央経済社、一九八九年)
- Fleetwood, S. [1995], *Hayek's Political Economy*, Routledge.
- Friedman, M. [1953], 'The methodology of positive Economics, in *Essays in Positive Economics*, University of Chicago Press. (佐藤・長谷川訳『実証的経済学の方法』、蔵書、富士書房、一九七七年)
- Hayek, F. A. [1955], *The Counter-Revolution of Science, The Free Press*. (佐藤訳『科学の反革命』、木鐸社、一九六七年)
- Keynes, J. M. [1936], *The General Theory of Employment, Interest and Money*, Macmillan. (磯崎谷訳『雇用・利子および貨幣の一般理論』、東洋経済新報社、一九七五年)
- Kuhn, T. S. [1962], *The Structure of Scientific Revolutions* (2nd ed. 1970), University of Chicago Press. (中川訳『科学革命の構造』、ちくま書房、一九七一年)
- Lakatos, I. [1978], *Criticism and the Growth of Knowledge*, Cambridge University Press. (佐々他訳『方法の擁護』、新曜社、一九八六年)
- Lawson, T. [1992], 'Realism, Closed Systems and
- Expectations', mimeo, Faculty of Economics and Politics, University of Cambridge.
- [1994a], 'A Realist Theory for Economics' in R. Backhouse (ed.), *New Directions in Economic Methodology*, Routledge.
- [1994b], 'Realism and Hayek: A Case of Continuous Transformation' in Colonna, M. et al (eds.) *Capitalism, Socialism and Information: The Economics of F. A. Hayek II*, Edward Elgar.
- [1996], 'Development in Hayek's Social Theorising' in Frowen, S. (ed.) *Hayek the Economist and Social Philosopher*, Macmillan.
- Lucas, R. E. [1976], 'Economic Policy Evaluation: A Critique' in Brunner, K. et al (eds.) *The Phillips Curve Labour Markets*.
- McClosky, D. N. [1985], *The Rhetoric of Economics*, University of Wisconsin Press. (長尾訳『ハートマン・マクロースキーの経済学』、一九九二年)
- [1990], *If You're So Smart*, University of Chicago Press.
- [1994], *Knowledge and Persuasion in Economics*, Cambridge University Press.
- Polanyi, M. [1958], *Personal Knowledge*, University of Chicago Press. (長尾訳『個人的知識』、ちくま書房、一九七五年)
- Popper, K. L. [1963], *Conjectures and Refutations*, Routledge & Kegan Paul (藤本・森・石垣訳『推測と反証』、法政大学出版局、一九八〇年)
- [1996], 『市場論の系譜学』、東洋経済新報社